

憐れみ深く、貸し与える人は良い人。裁きるとき、彼の言葉は支えられる

112編は111編と対になったものであり、やはり「いろは」歌であるが、ここでは形式には捉われずに詩を味わってみよう。讚美歌と組み合わせて朗読したり、一節ずつの輪読も良い。

1節 ハレルヤ。いかに幸いなことか/主を畏れる人/主の戒めを深く愛する人は

当然この節は詩編 1:1-2「いかに幸いなことか/神に逆らう者の計らいに従って歩まず/罪ある者の道にとどまらず/傲慢な者と共に座らず/主の教えを愛し/その教えを昼も夜も口ずさむ人」を思い起させるが、こちら（詩編 112）の方は簡潔で、すっきりしている。1:1 は「トーラー」が二度繰り返されているが、ここでは「諸戒め」（ミシュヴァート）である。「トーラー」は一般に「モーセ5書」を指すが、「ミシュヴァート」はもう少し広い法体系、主が命じられた戒めを広範囲に指すのだろう。現在のように、「民法」「刑法」「商法」「訴訟法」などが無い時代、イスラエルにはこれだけの基本法があったことに驚きを感じる。まあ、ローマ法が現在の世界の法体系の基礎になっているのかも知れないが、...

また、「主を畏れる」は111:10の響きを受け継ぎ、当然、箴言 1:7「主を畏れることは知恵の初め」を思い起こさせる。主なる神は「教え＝トーラー」と「戒め」においてご自身の意思を啓示し、「教え」「戒め」は「主の」教え、戒めであり、主なる神とその教え、戒めは表裏一体なのである。

「畏れること」と「深く愛すること」が対になっていることにも教えられる。

2節「彼の子孫はこの地で勇士となり/祝福されたまっすぐな人々の世代となる。」アブラハム、イサク、ヤコブの子孫たちはこの約束の土地を得て、神（と隣人たち？）から喜ばれ＝祝福された「世代」となると謳う。それは、主なる神の祝福の「継承」である。父祖母―両親―子どもたち―孫たち。「まっすぐ」＝正直（せいちよく）であること、嘘偽りがなく、背筋の真っすぐな生き方は素晴らしい。

3節「彼の家には多くの富があり/彼の善い業は永遠に堪える。」

イスラエル人は神の祝福を簡単には「精神化」せずに、財産を蓄積することを喜んだ。後に、マックス・ウェーバーはカルヴィン主義における正直で、真面目な努力・労働が富を蓄積する（浪費せず）ことに繋がることを示した。彼の善い業（働き）は一時的なものではなく、永続するものであると約束されている。

4節「まっすぐな人には闇の中にも光が昇る/憐れみに富み、情け深く、正しい光が。」光がないと人は歩くことも、正しい道を逝くこともできない。闇そのものである。しかし、信仰によって、正直（せいちよく）に生きる人には闇の中でも、外なる光も内なる光も輝く。その神の光は、憐れみに富み（ハンヌーン）、共感力のある（ラフーム）、義なる（サディク）光である。

5節「憐れみ深く、貸し与える人は良い人/裁きるとき、彼の言葉は支えられる。」直訳「良い人という

ものは（隣人に）好意を示し、貸す人である。裁きにおいて（ベミシュパート）彼の言葉・事柄は導きを受けるであろう。「貸し与えること」は9節において「貧しい人々にふるまいを与え/その善い業は永遠に堪える。」とも言われている。「喜捨」はイスラム教においても信仰者がなすべきこととされている。実際の「貸すこと」（ラーヴァー＝「借りる」のヒフィール形「借りる原因を作る」から「貸す」。これは貸借の法的行為である。他方、「ふるまい」（ピツザル）は「散らすこと」を意味する。英語は「彼らは自由に分配した、彼らは貧しい者に与えてきた。」牧師（そしてキリスト者同士）はその責任上（返してくれないと相互不信に陥る）、金の貸借をしない方が良いが、「散らし、貧しい者に与えること」をどう考えるか？

6節「主に従う人はとこしえに揺らぐことがない。彼はとこしえに記憶される。」直訳：「義なる人は決して動かされることはないであろう。彼らは永続的に記憶される。」励まされる言葉である。

7節「彼は悪評を立てられても恐れない。その心は、固く主に信頼している。」直訳：「彼は悪いニュースを恐れない。彼の心はYahwehに固着されている。」人の評判、また、悪い音信をどのように受け、また、受け流すか？ 聴く耳を持つことと何を聞いても核心・確信が揺らがないこと。

8節「彼の心は堅固で恐れることなく/ついに彼は敵を支配する。」直訳：「彼の心は確立され、恐れない。彼が彼の諸敵の上に（彼の願い）を見るまでは。」

9節 前半部分は前述した。後半「その善の業は永遠に堪える。彼の角は高く上げられて、栄光に輝く。」直訳：「彼の義はとこしえに続き、彼の角は栄誉において（ヴェカーボード）上げられる。」

10節 「神に逆らう者はそれを見て憤り/歯ぎしりし、力を失う。神に逆らう者の野望は滅びる。」詩編1:1の「神に逆らう者の計らい」が最後に登場する。「ラーシャー」＝邪悪な者（本文に「神に」逆らうはない）。信仰者の祝福を見て嘆き、歯ぎしりし、溶け去り、邪悪な者の願い（タアーヴァト）は滅びる。

まことに主なる神に、その憐れみ深さに信頼して生き、その戒めに従って生きるものは幸いであり、いろいろ揺らぎはあるであろうが、根本的に不動である。